

蒙古字韻四庫採進本及び現存写本の書写時期

吉池孝一

1. はじめに

ロンドンは大英図書館の Oriental & India Office Collections に朱宗文による校訂の序(元代の至大戊申・1308年)が付された蒙古字韻の写本が所蔵されている。この現存する写本を『ロンドン写本』とよぶ。これは現在知られているたった一つのテキストであり、尾崎1962の欠筆に着目した研究により清の乾隆年間(1736-1795年)に書写されたことが分かっている¹。さらには、書写の下限を乾隆42年以前とし得る場合もあるという²。本稿は、書写時期の上限をいまま少し限定し、乾隆37年(1772年)以降としたい。これは四庫全書の編纂にかかり書籍の収集が開始された時期である。

また、『四庫全書総目提要』(以下、四庫提要)には蒙古字韻の「四庫採進本」(写本)の構成などが記されている。その「四庫採進本」が提出された時期は、四庫全書の編纂にかかり書籍の収集が大規模に行われた時期すなわち乾隆37年(1772年)から乾隆43年(1778年)にわたる頃には違いないのであろうが³、書写された時期も同様の頃とする。すなわち、

- ・『ロンドン写本』の書写年は乾隆37年から乾隆60年(或いは乾隆42年)。
- ・「四庫採進本」の書写年は乾隆37年から乾隆43年(或いは乾隆42年)。

上記の二点は、「四庫採進本」は採進時に新たに改定書写されたものであり、『ロンドン写本』は「四庫採進本」と同一書であるか或いはその写しであるという想定による。

2. 「四庫採進本」と『ロンドン写本』

『ロンドン写本』は「四庫採進本」(写本)と同一書であるか或いはその写しである可能性があると早い時期に指摘したのは遠藤1990である⁴。この説につき、吉池1993は幾つか

1 “鈔本作成の時期は、欠筆によって知ることができる。鈔本で、字の最終の一面を欠くものは、玄【下11b,7-8】、胤【下2b,8】、弘【上9b,3】、曆【上22a,8】であって、顛【上10a,9】、琰【下23a,6】、旻【下2a,7】、寧【上11a,4】に及ばない。すなわち、康熙(玄燁)、雍正(胤禛)、乾隆(弘曆)各帝の諱を忌むべく、嘉慶(顛琰)、道光(旻寧)各帝のそれを忌むに及ばない時代、いいかえれば乾隆時代に鈔写されたのである”(164頁)。【】内は吉池の補。

2 乾隆40年及び42年の二度にわたって外国人名地名改訳の諭告が発せられたけれども、現存する蒙古字韻写本にはその諭告が反映されていない。即ち、朱宗文の別名“朱伯顔”は、諭告に従うならば、現に『四庫提要』にあるように“朱巴顔”とすべきであるがそのようになっていない。これより、“諭告に最も近い場所”で写本がつくられた場合に限って、書写の年代を乾隆42年以前とすることができる。(以上取意)

3 黄愛平1989によると“在全国範圍搜訪征集圖書，是《四庫全書》編纂初期一項規模浩大的重要活動。這項工作始於乾隆三十七年(1772年)，迄於四十三年(1778年)，而以三十八、三十九年間為最高潮”(22頁)とある。

4 “英国図書館本が『四庫全書総目』に言及されている本そのものか又はその模本である可能性を私は考えたく思うが、今の所その仮説の当否を検証するすべが見当たらない”(31頁)とある。なお、英国図書館本即ち本稿でいう『ロンドン写本』を内府本とし得る根拠の一つに、写本が納められた帙をあげておられるが、帙は1921年以降新たに作られたか或いは他の帙を流用した可能性もあることは吉池2008aで述べた。

の事実を付け加えたわけであるが、現在の考えも合わせて両者の関係を再度述べると次のようになる。

「四庫採進本」の構成と状態は『四庫提要』に書かれている。それを現存する『ロンドン写本』と比べ見ると、両者の構成および篆字母の数がぴたりと一致する。両者の構成は、ともに二巻であり、ともに“廻避字様”を第二巻末に置く。“廻避字様”を巻首ではなく巻末に置くなどということはあってはならないことであり、そのような特異な構成が一致しているのである。この事については次節で述べる。また、篆字母は両者とも不足しているにもかかわらずその数が一致する⁵。これより、『ロンドン写本』は「四庫採進本」そのものであるか、「四庫採進本」の副本であるか、それとも「四庫採進本」を書き写したものであるか、そのいずれかとして大過ない。そうであるならば、「四庫採進本」が具体的にどの様なものであったか、その細部についても現存する『ロンドン写本』によって知ることができる。すなわち、『ロンドン写本』をもって、『四庫提要』に書かれた「四庫採進本」を論ずることができるのである。

3. 『ロンドン写本』の異例

『ロンドン写本』は上下二巻に分かれているが不審な点が幾つかある。その1、上巻巻首の総目は上下巻に分かれていない。その2、下巻は第六佳韻の途中から始まっている。その3、下巻表紙には上巻表紙のパスパ文字の誤を受け継いだ部分がある。これは当初下巻の表紙はなかったがその後に上巻表紙を参照して下巻表紙を作ったことを物語る。以上の3点は、もと一卷であったものを機械的に上巻と下巻の二巻に分けたことを示すものである。

いまひとつ『ロンドン写本』には不自然な箇所がある。下巻末尾すなわち本文の末尾に、半葉が欠落した“廻避字様”が置かれている。その“廻避字様”の最後の部分には“今、諸韻に収め尽くしていない漢字を付け加える。韻の中で細解したものは皆新たに付け加えた字である”⁶と書かれている。これは、これから始まる本文の中で義注を付したものは増加字であるということを宣したものである。当然のことながら、この“廻避字様”の一葉は本文前の巻首になければならない。

上記のように、『ロンドン写本』(即ち「四庫採進本」)は異例な構成を持つわけであるが、このような書物が元代より伝わっていたとは到底思えない。このような構成は、何らかの目的のためにとられた後代の措置と考えるべきである。それを四庫全書の編纂に関わる措置と想定する。

⁵ 『四庫提要』によると「四庫採進本」の“篆字母”は98字とある。この字数は『ロンドン写本』と一致する。もっとも『ロンドン写本』を見ると、喻母・澄母・従母の三つが欠けており、それで98字となっている。

⁶ “今添諸韻収不盡漢字、韻内細解者並係新添”

4. 「四庫採進本」作成

先に述べたように『ロンドン写本』の藍本は、一卷本であり首尾にいささか欠落があり、廻避字様は巻首にあった。このような一本が伝わっていたことは確かである。

時代もくんだり、清朝の乾隆年間に至ると、四庫全書の編纂にかかる書籍の収集が大規模に行われた。乾隆 37 年 (1772 年) から 43 年 (1778 年) にわたる頃のことであるという。

『ロンドン写本』の藍本も収集の候補にのぼったのであろう。しかしながら、巻頭と末尾の二箇所欠落が生じており、すでに完本ではなかった。そこで、この巻頭と末尾の二箇所欠落のある一本を書き写す際に、半葉が欠けていた廻避字様を本文末尾の欠落の後に移し、欠落した部分を一箇所にとまとめた。そしてさらに、一卷であったものを上下二巻に分けた。これで、目に付く欠落部分は下巻の末尾のみとなった。なぜこのようなことをしたのか。それは、体裁を整えて「四庫採進本」(写本)として提出するためであった。「四庫採進本」は採進時に新たに改定書写されたのである。

5. 「四庫採進本」と『ロンドン写本』の書写時期

「四庫採進本」(写本)が採進時に改定書写されたとなると、その書写年代は、四庫全書の編纂にかかり書籍の収集が大規模に行われた時期すなわち乾隆 37 年 (1772 年) から 43 年 (1778 年) にわたる頃ということになる。これにつきなお考慮すべき点もあるが今のところこのように考えておく。いっぽう、『ロンドン写本』は「四庫採進本」と同一書であるか或いはその写しであるから、その書写時期は乾隆 37 年 (1772 年) から乾隆最末年の乾隆 60 年 (1795 年) までとするしかない。これに、尾崎 1962 の書写の下限を乾隆 42 年以前とし得る場合もあるという説を加え、両書の書写年を以下のようにする。

- ・「四庫採進本」の書写年は乾隆 37 年から乾隆 43 年 (或いは乾隆 42 年)
- ・『ロンドン写本』の書写年は乾隆 37 年から乾隆 60 年 (或いは乾隆 42 年)

<参考文献(発行年順)>

尾崎雄二郎 1962. 「大英博物館本蒙古字韻札記」, 『人文』第 8 集, 162-180 頁。

黄愛平 1989. 『四庫全書纂修研究』, 北京: 中国人民大学出版社。

遠藤光暁 1990. 「在欧のいくつかの中国語音韻史資料について」, 『中国語学研究 開篇』第 7 号, 25-44 頁。

吉池孝一 1993. 「『蒙古字韻』の元刊本と乾隆写本」, 『中国語学』(日本中国語学会)第 240 号, 31-40 頁。

吉池孝一 2008a. 「蒙古字韻の改装などについて」, 『KOTONOHA』第 65 号, 11-12 頁。

吉池孝一 2008b. 「原本蒙古字韻再構の試み」, 『International Workshop on Hunminjeongeum and hPags-pascript』韓国学中央研究院 (2008 年 11 月), 141-155 頁。